

のうちの、ほんの幾つかを述べたに過ぎません。現実的制約によって試行錯誤を余議なくされるでしょうが、体制や運営が検討される機会に、大きい方向性を見失うことなく、それに沿っての模索が強められることを望むものです。

コメント 3. 物性研究者の立場から

広大・総合科学部 渡部三雄

物性の立場から二、三の問題点をあげる。

○ 物性研究者あるいは物性グループにとっての基研

基本的に、物性研究者にとって基研とは何なのか、誰のために何故必要なのか、あるいは、誰が必要としてそれをつくっているのか、というような問題は、原点にかえて考えなおす必要があるだろう。一つは、物性関係のもう一つの共同利用研である物性研との関連、特に物性研の理論関係部門との関連の問題もある。いずれにしても、どのような基盤の上に基研が成り立っているのかははっきりさせる必要がある。基研の運営について、物性研究者が組織としてどのように責任を負っているかももっとはっきりさせた方がよい。もちろん、物性グループ全体が基盤であり責任を負っているのに違いないし、物小委あるいはさらに直接的には物性関係の基研研究部員が責任を負っている。しかし、残念ながら現状ではそのような責任体制が機能していないように思う。物性関係の研究部員の部員会議への出席率の低さがその表れの一つである。部員選出の際に選挙運動も行われているようであるが、基研の役割、機能、体制、運営について何を期待するのか、同時に自らがそれにどう関与し責任を負うのかの議論の上に立って、部員の選出が行われるべきだろう。責任の存在の不明確さとの関連で深刻な問題は所員の任期制であろう。いうまでもなく任期制は研究者グループがその必要性を認めて設けているはずだが、現状ではややもすると所員にだけその重みが押しつけられてしまっている。解決の名案はないにしても、研究グループ全体の共同責任であることを常に念頭に置くことはもちろん、何らかの責任執行の機能をグループとして持つべきである。

物性グループにとっての基研という観点で、一つ付け加える。基研将来計画の研究所の国際化と若手研究者養成の重視は、現在進行中の物性研の将来計画（比較的大型の研究施設建設をとまなうプロジェクト中心の計画）の中で欠けている重要な方針と思う。基研が将来このような機能を果すよう発展することを期待する。

○ 基研の中での物性

基研、ないしは基礎物理学研究に於ける物性研究の位置づけ、役割について述べる。一つの考えとして

基研のような小さな単位の研究機関としては、物性部門まで置かなくても良いという考えもあり得ると思う。しかし、これまでの個人的な基研とのかかわりを通して、基研の物性部門の存在が、固有の研究分野の発展のみでなく、基研を中心とした新しい研究グループ（必ずしも物性分野に閉じていない、例えば多体問題の研究グループなど）の育成にとって、大きな役割を演じて来たと思う。（今回のシンポジウムでも、方法論的な点では特に、素粒子、原子核、物性の各分野での発展の相互交流の必要性が指摘されているが、）分野間の交流の場としての役割を基研が果してくれることを大いに期待している。

物性研究の分野は多様であり、多岐であることを考えると、物性の立場からは、現在まで物性関係の部門が基研にたった一部門しかなかったことは非常に不満足であった。固有部門としての役割を果たすうえでも、共同利用研の機能のうえでも、これは不十分であったが、幸い物性関係・固有部門増の可能性が出て来たのは喜ばしい。新しい部門も含めて、他分野部門との協力関係の問題など、基研の固有部門の役割、位置づけを議論する良い機会である。

コメント 4. 国際交流を進める事についての短いコメント

東大・理 山口 嘉 夫

今日は久しぶりに、若手から色々と面白くまた卒直な意見を聞くことができて楽しかった。しかし皆さんはもうおなが空いて来た頃と思うので、簡潔に述べたい。

× × × ×

最近アメリカとヨーロッパへ行く機会があり、情報をあつめたりまた色々な人と話しあったりして、考えさせられる事が多かった。それでそう云った事から話を始めたい。

日本は、長らく、高エネルギー物理の活発な地域（欧米）から遠くはなれた「極東の孤児」であった。しかし、近頃我国の周囲に顕著な変化が起り始めた。我国の周囲というのは東南アジアと西太平洋地区のつもりで、この二つは重なりあうが同じではない。以下この二つの地域の和を「我国の周囲の地域」、略してSEA+WPAと呼ぶ——South and East Asia plus Western Pacific Area.——

SEA+WPAでは高エネルギーの理論家がやたらに増えてきたし、その傾向は今後も続くだろうと予想される。更にこの地域内のいくつかの国々（China, Korea, Vietnam, Australia, ...）を思い浮べれば判るように、この地域出身の高エネルギー実験家で、欧米で活躍している人の数も、最近どんどん増えてきた。今はまだ（日本のように）理論の方が実験の人数より多いけれど、これから5年、10年の間は、実験家ののびが大きくて、ともかく高エネルギー物理屋の数が今よりうんと増えることは間違いない。

こういう傾向を象徴する事実、北京郊外にやがて建設される筈の50 GeV陽子加速器である（さら